遊びへの関わり

高橋　陽子

当園の年少組保育室には、プラレールの木製盤がある。レールも汽車も多種類ある。年少の担任は三回目であるが、年度によって時期によって子どもの汽車遊びの様子は違う。その都度悩むことも違ってくる。

入園してまなしの頃は、朝、保育室に入るなり、汽車の入ったかごを取り、流し台の近くの机におき、手洗い、うがい中も、そこにあって誰にも触られないことを横目で確認し、終わるやかごを抱きしめ、レールの方へ行き遊び始める子がいる。他の遊びたい子とどう折り合いをつけるか、でまず悩まされる。そのカゴを持つことが、初め

て親と離れ知らない場所や人に囲まれた時に安心を得られる唯一のことであれば、それもわかってあげたいし、やはり汽車で遊びたい他の子ども達の心の安定も確保したいと思うと、お互いの気持ちに頷くだけが精一杯の担任になってしまう。また、黒い汽車だけを握りしめたり、かごや袋物に入れて持ち歩くことから始まる子どももいる。他の子どもが長くつなげている中から黒だけ取ってしまったり、黒にこだわる子を見て、何だか黒が欲しくなって取り合いになったりもする。一つだけ貸して、と言ってみたり、他の組に探しにでかけたりしながら、気持ちが軽くなったらいいな、と子どもに期待する部分も持つ。

入園してしばらく経ち、汽車で遊ぶ仲間が固定し始めると、別の悩みが出てくる。一つは、仲間うちでは、レールのつなぎ方も工夫し、走らせ方もちょっとした規則性を持たせよく遊んでいるな、と感心させられる程なのに、いつもと違うメンバーが入ろうとするとかなり強烈に拒否すること、である。お互いにコミュニケーションをとるのが難しい時期なので、入る方もいきなり汽車を走らせようとするし、入られた方も、「バカ、あっち行け」など言って追い出そうとするところからとっ組み合いになってしまう。いつも担任がお膳だてをするのがいい、とは思っていないが、コミュニケーションのとり方を伝えることで、自分の気持ちを出すことと相手の気持ちを知ることは、両方大切なこと、とわかっていって欲しいと思う。汽車遊びのメンバー構成と、まわりにいる子どもの様子とを窮いながら、担任としてどう動こうかと穏やかな気持ちで見ていられない時もある。

もう一つは、汽車遊びをどうしようか、という悩みである。レールはうまくつなげて一周してい

るし、汽車の走らせ方にしても、すれ違う時は、待つ所ができていてバックさせて一時そこにいて、のように暗黙の了解がされているようだ。アナウンスや鉄道の名は思い思いのことを言っているが、穏やかに遊んでいる。このような場面をみると、担任としてどう接したらいいのか、と考えてしまうことがある。しばらく様子を窮っていたり、「くるって一周つながっているのね」「ここが待つところなのね」と目で見てわかることを言ってみたり、「何線ですか」「どこ行きですか」と聞いてみたり、「駅はどこですか」「車庫はあるのかな」「積木でトンネルを作ってみたら?」と展開を促すことばかけをしてみたりする。喜々として説明したり、そうだね、と作ってみたり、「先生はあっち行ってていいの」と言われることもある。

子どもが担任を頼らずに遊んでいる時の担任の在り方で、汽車遊び以外でも悩むことがある。子どもが自発的に遊びを見つけ、生活していく力を培って欲しいと願っていても、今度は遊んでいるそばから、どうにかして持続することや、もっと子どもの気持ちを高めるにはどうしたらいいかしら、と考えているのである。このことは、時と場合、その子ども、そのメンバーで対し方は違ってきているが、どう在るべきかで悩むことは多い。

昨年度は、年長の担任であった。男児三人組（仮にA・B・Cとする）が、テレビの影響で、ドクロゲームをやりたい、と言い出す。Aが言い出し、必要なものを集め（紙や風船のかわりのビニル袋など）やり始めると、Bはテレビそのものイメージでやりたい、とかなり担任を頼り、Cはそこにいることが楽しい、という居方だった。担任は、Bに頼られることもあったが、Aのやりたい気持ちを実現させたく、又、せっかくなら回

りの子どもに参加してもらうことで、固まりがちな三人だけの関係を変えていきたい思いもあり、かなりの時間を費やした。結局、AやBの中にあるテレビの世界を幼稚園で実現させたい、という思いは担任にはどうすることもできず、自然消滅的になってしまった。今思うと、初めからメンバーの一人として三人組といるのではなく、Aのアイディアを Bに伝えたり、三人組なりの過程を支える動きをしていたら、違うものが出てきていたのか、とも思う。

AとCには、電車の趣味があって、普通はお店として使っている木製の屋根つき台を電車にみたて、メーターやハンドルを紙で作って台におき、イスに座って運転を楽しむ姿があった。自動券売機を箱で作ったり、定期や切符を作り駅員さんにもなっていた。Bは自分もやりたいが、物がそろってもどうやっていいかわからない。自分なりに楽しむことが苦手で、AやCがそれなりになりきってしていると、邪魔をしてしまうところがあった。そんなBの態度がAやCには我慢ができず、除外するようにもなっていった。

この頃クラス内でもBは孤立していた。電車ごっこも、担任の目にはマンネリ化して見え、何か一工夫ないかしらと思い、人を乗せられて、しかも動く電車を作ったら、もっと彼らのしていることが回りの子ども達にもよくわかるのではないか、そこから交流ができ、活性化していくのではないかということで電車づくりを始めた。冷蔵庫

が入っていたような大きいダンボールを二つ使い、一車輛になるようにつなげ、窓をくり抜いたり彼らのイメージの地下鉄の色を塗ってみた。Aは早速、ワイパーをつける、ドアもあくようにしたいと言い、何とか実現させていく。AやCは自分たちで楽しめるところがあり、ダンボールのわくの中にイスを並べるものの、お客がいなくても運転手になりきっている。担任は、年中児などが乗りたがっているのを知っていたので、イスをよけ実際に廊下を走ることを勧める。大勢ではないが、お客が乗り降りするようになった頃、Bが切符を配り始めた。そして、「切符ってパチンって切るよね」と言ってから、一穴パンチを出してきたのである。切符係として自分から参加したBに、担任は嬉しくなり、AやCも再び一緒にいるようになった。

さて現在年少組の担任をしていて、気になる遊びは、電車やバスの運転手さんごっこ。プラフォーミングという柔らかい素材でできた小型積木で、運転席を作る。たいていタイヤのないトラックのように長短二個の積木を重ね、低い方にまたがって座り、高い方にハンドル（積み木だったりブロックだったりする）を置いて、アナウンスしながらハンドルを動かしている。プラフォーミングやイスを長くつなげて座席を設け、しきりに「乗って下さい」とアナウンスしている。この遊びが始まった頃、「何行きですか」と担任が聞き、行先を紙に書いて貼るようにしていたが、今は自分たちから「○○行きって書いて」と言ってきている。また、そこに着いたらしく「今度は○○行きって書いて」と言ってくる。

「乗っていいよ」や「先生、乗ってよ」の誘いにはなるべく応じたいと思いつつ、他の要求におされてしまうことが多くなる。乗れないまでも「○

○君のバスが出発するそうです」「○○に行きたい方はお乗り下さい」など、子どもの声よりは目立つ声を発し、一人でも乗客になってくれる子がいることを願っている。

ある時は担任と六人位の子どもが乗りこみ、バスの中で歌ったりお菓子を配りっこしたり果ては列をなして遊戯室まで行き、一遊びして戻る、という数十分の動きをしたが、バスの運転手になりきっていた男児の気持ちにはそぐわない流れを担任が作っていたのではないか、との思いが残る。乗客として保育室内でプラフォーミングの座席に座っている間は運転手と乗客という関係の中で動いていたものの、席を立った瞬間から、その男児は、運転手でいたいのに、という気持ちが残ったかもしれない。

この運転手さんごっこは、三ヵ月くらい続いている。形を作り、行先を書いて貼り、それぞれに運転したりアナウンスする運転手さんごっこ。今後どう展開するだろうか。子どもから動き出すのか、担任が動くか。ただ今のところ、どうしようか、という考えが出てこないのも事実である。

どう在るべきか。担任として、どうことばをかけ、接していくことが、子どもの主体性をのばし人間性を豊かにしていくのか。保育中忙しいのは事実であるが、何に対し忙しく動いているのか、ちょっと立ち止まってみるのも必要な自分の保育かもしれない。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）